

2024年度 事業の概要

1 調査と研究

飛鳥・藤原宮跡等の発掘調査	22
平城宮跡等の発掘調査	22
企画調整部の研究活動	23
文化遺産部の研究活動	24
埋蔵文化財センターの研究活動	25
国際学術交流	26
公開講演会	27
研究集会・学会・研究会等の活動	27
科学研究費助成事業等	27
国が実施する事業等についての調査・協力	29
●平城宮・京跡の整備と情報発信	29
●高松塚古墳壁画の保存活用のための調査研究	29
●キトラ古墳に関する調査研究	29
現地説明会	29

2 展示・公開

飛鳥資料館の展示	30
平城宮いざない館の展示	30
平城宮跡資料館の展示	30
解説ボランティア事業	31
図書資料・データベースの公開	31

3 その他

刊行物	32
-----	----

1 調査と研究

飛鳥・藤原宮跡等の発掘調査

都城発掘調査部が飛鳥・藤原地区において2024年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡で1件、藤原京跡で1件、飛鳥地域で1件である。また、立会調査は6件である。以下、主要な調査成果の概要を示す。

藤原宮内裏東官衙地区の調査（第216-5次）は、橿原市高殿町内における個人住宅の離れ建替にともなう発掘調査である。調査面積は12m²、調査期間は11月25日から12月2日である。調査の結果、内裏東官衙の西限にあたる南北溝SD850の西肩と、奈良時代の南北溝SD6075等を検出した。

藤原宮外周帶・藤原京六条大路・左京七条二坊の調査（第216-1次）は、橿原市別所町内における農業用倉庫建設にともなう発掘調査である。六条大路の検出が見込まれたため、調査区は道路側溝の推定位置にあわせて北区・南区の2か所とした。調査面積は32m²、調査期間は4月15日から同月26日である。調査の結果、北区・南区で東西溝を1条ずつ検出した。両者の心々間距離は14.4mで、六条大路両側溝にあたると考えられる。

石神遺跡東方の調査（第217次）は、石神遺跡の区画東南隅の確認を目的とした学術発掘調査である。調査面積は301m²、調査期間は12月9日から3月17日である。調査区は第209次調査区（2021年度）の東側に位置し、第212次調査区（2022年度）の西端と重複している。調査の結果、7世紀後半から末の東西塙SA311が10間分東へ延び、その東端で北に折れて南北塙SA4660となることが判明した。SA311の西端は石神第3次調査区（1983年度）にあり、そこで南北塙SA751に接続していたと考えられる。今回の調査により、SA311の総長は約133mとなり、7世紀後半から末の石神遺跡に大規模な区画が存在したことがあきらかとなった。しかしながら、調査区内では7世紀前半から中頃の東限となる南北塙は検出できなかったことから、石神遺跡は、7世紀を通じてさらに東方へと広がる可能性が高いことが判明した。

このほか、調査区内では奈良時代以降の自然流路NR310や、古墳時代の竪穴建物、弥生時代の土坑などを検出している。

平城宮跡等の発掘調査

都城発掘調査部が平城地区で2024年度に実施した発掘調査は、平城宮跡1件（第664次）、平城京跡9件（第660～663・665～669次）。延べ面積2,097m²。

平城宮西北部の調査（第664次）は、個人住宅建設にともなう小規模調査。顯著な遺構・遺物は確認できなかったが、奈良時代と思われる整地土を検出し、その標高情報を得ることができた。

平城京跡では、平城宮跡に隣接する東院南方遺跡での発掘調査（第667次）が特筆される。遺跡の実態解明および今後の保存活用を一層推進するため、継続的な学術調査に着手した。180m²の調査区を設けて実施し、条坊遺構（二条条間南小路と二坊坊間西小路）と複数棟の掘立柱建物を検出した。結果、坪ごとの土地利用から四町占地による利用へと変化する状況が判明した。

また、寺院での調査も注目される。西大寺金堂院の調査（第664次）は、開発事業に伴い490m²の調査区を設けて実施した。西面回廊の礎石据付穴や雨落溝を検出したほか、内庭部では礫敷とともに磚で囲まれた土坑を確認した。この土坑は、金堂院中軸ライン上に位置しており、灯籠の抜取穴と考えられる。なお、調査中に実施した地元公開も好評を博した。薬師寺回廊西北隅・鐘楼の調査（第665次）は、伽藍復興・復元計画策定のための発掘調査。回廊では礎石据付穴や壁下地覆石を検出したほか、基壇外装が良好な状態で遺存していた。鐘楼では、南階段の地覆石および東辺基壇外装抜取溝を検出できたことで、その平面規模を正しく把握できるようになった。このほか、近年、法華寺町で開発事業にともなう発掘調査が増加しており、今年度は計5件の発掘調査を実施した。

これらの調査成果のうち、一部については2025年12月刊行の『奈良文化財研究所発掘調査報告2025』で報告し、その他も隨時報告書を刊行する予定である。

発掘調査のほかに工事立会調査も実施しており、平城宮跡10件延べ70日、平城京跡24件延べ57日。

企画調整部の研究活動

企画調整部は、地方公共団体の文化財担当者に対する専門的な研修、奈良文化財研究所の調査研究成果や文化財に関する情報の発信、文化財情報の収集・発信システムの研究と情報内容の充実、国際的な文化財の調査や保護に関する協力・支援と学術交流・研修、平城宮跡資料館等における研究成果の展示公開と普及活動、文化財記録写真の撮影手法に関する開発・研修といった事業を実施している。また、奈良文化財研究所がおこなう様々な事業について、全体的・総合的な企画としての調整、そして、事業成果の内外への情報発信や活用を担当している。

企画調整室が管轄する文化財担当者専門研修は、令和6年度に13課程を実施した。一部課程では、オンラインを活用した研修の実施や、地方自治体からの協力を受けての現地での研修実施など、様々な手法を試みた。その結果、総数329名の受講者を受入れ、研修後におこなったアンケート調査では高い満足度を得ることができた。このように、文化財保護行政に資する研修となるよう、内容や開催形態などの工夫を続けていく。

文化財情報研究室では、文化財情報電子化の研究と研究所事業の多言語化を進めている。文化財情報電子化の研究では、発掘調査報告書に関するデータベースである全国遺跡報告総覧を研究所ウェブサイトにて公開しており、国の内外より極めて多くのアクセスを得ている。遺跡情報・遺構情報・遺物情報の収集管理や活用に関する情報収集は継続的に実施しており、各種データベースへのデータ入力・更新を日常的におこなっている。また、近年には、文化財総覧WebGIS、全国遺跡報告総覧などの奈文研に蓄積された文化財情報を中核とし、国立研究開発法人 産業技術総合研究所、国土交通省国土地理院などの国内外の関係機関との連携の枠組み作りを進めている。文化財分野へのAI利用の研究も進めている。多言語化事業に関しては、文化財の多言語化自体を研究するべく研究報告の刊行、用語辞書の作成を進めている。

国際遺跡研究室が主管する文化財保護に資する国際協力には、①アンコール遺跡群西トップ遺跡を中心としたカンボジアとの共同研究事業、②文化庁受託事業である文化遺産国際協力拠点交流事業（相手国拠点：ウズベキスタン）、③ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修事業への協力がある。これらに加え、最近では特にウクライナ戦災文化財の保護に

関する支援活動、カザフスタンにおける文化遺産にかかる専門的技術移転、イギリスの諸機関との共同研究等にも注力している。

展示公開活用企画室では、各部・センターの協力のもと平城宮・京に関する調査成果の発信、奈文研の最新の研究成果の発信に努めている。今年度は平城宮いざない館において、夏期企画展「万葉挽歌（レクイエム）一人形からみる吉の奈良一」（7月13日～9月1日）を開催し、これまでにないテーマと新手法を取り入れた展示にチャレンジした。秋には平城宮跡資料館で秋期特別展「聖武天皇が即位したとき。一聖武天皇即位1300年記念一」（10月22日～12月8日）を開催し、都城発掘調査部が昨年度末におこなった発掘調査で出土した木簡を、迅速に展示することができた。さらに、奈良国立博物館の協力を得て、奈良国立博物館なら仏像館第13室にて特別陳列「聖武天皇の大嘗祭木簡」を開催し、多くの方々に出土木簡を見ていただくことができた。さらに、関連イベントとして、平城宮跡管理センターおよび奈良女子大学との共催で、「ナイト☆サイト☆ミュージアム」を開催した。平城宮跡の大嘗宮跡のライトアップや第一次大極殿院の大極門前での雅楽の演奏や大住隼人舞による演舞を実施した。2月からは春期企画展として、平城宮跡資料館で発掘速報展「UnEarth2025」（2月15日～4月13日）を開催した。合計8回のギャラリートークを実施し、発掘調査の成果のみならず、奈文研の最新の研究成果を盛り込んだ展示内容であり、好評を博した。会期中、研究員と平城宮跡をまわるウォーキングイベントも実施し、平日にもかかわらず、約90名の参加をえた。この他、発掘調査部やかりうちプロジェクト等の情報発信にも協力し、現地説明会の補助やXの発信も精力的におこなった。

写真室では、研究所内外の調査研究における各文化財記録写真の撮影、写真データの保存管理をおこなっているほか、写真記録の高精度・効率化を目的に様々な撮影手法を開発している。また、文化財写真、報告書作成にかかる文化財担当者研修を担当している。

近年では、キトラ、高松塚両古墳の壁画の経年記録の撮影、法隆寺金堂壁画の撮影協力、第一次大極殿院東楼の復原工事の記録写真の撮影等を定期的に実施している。このほか、研修動画を作成し、ACCU主催の海外の文化財担当者を対象とした研修事業の現地ワークショップ講師を数多く担当し、近年ではリモートでの講師も務めている。

文化遺産部の研究活動

2024年度の組織改編により、従来は都城発掘調査部 平城地区、飛鳥・藤原地区に所属していた史料研究室・遺構研究室が、文化遺産部の歴史研究室・建造物研究室と合併し、新たに歴史史料研究室・建造物遺構研究室となった。景観研究室は従来通りだが、遺跡整備研究室は遺跡研究室となった。その4室がそれぞれ、書跡資料・歴史資料・出土文字資料、歴史的建造物・伝統的建造物群・発掘遺構、文化的景観、遺跡整備・庭園について、専門的・総合的な調査研究をおこなった。その成果は文化財の指定・登録・選定や保存と活用に関する国の文化財保護行政に資するものである。

●歴史史料研究室の調査と研究

組織改編の結果、調査研究の範囲は多彩となった。日本を代表し世界文化遺産に登録されるような古寺社等に伝來した書跡資料・歴史資料についての、奈良を中心とした継続的な調査研究にくわえ、飛鳥・藤原宮京・平城宮京、さらには日本各地・海外から出土した木簡など出土文字資料の調査研究を実施している。

書跡資料・歴史資料は、主に下記の調査研究を実施した。当麻寺経典は北21函～北32函、南9函～南12函の調書作成。興福寺は第81函の調書作成。東大寺は新修文書調査。唐招提寺は聖教第4函～第6函の、仁和寺は御経蔵聖教第110函～第113函の、薬師寺は第60函・第61函の調書原本校正。また奈良市教育委員会との連携研究「大宮家文書の共同研究」のほか、調査協力の依頼を受けて、石山寺文化財調査・文化庁による仁和寺聖教調査に協力した。

出土文字資料は、2023～2024年度出土の平城第658次・第662次・第667次調査木簡について整理を進め内容を公表した。とくに、聖武天皇の即位1300年にあたる2024年に奇しくも出土した大嘗祭関係の木簡を迅速に整理し、記者発表1回（7月2日）、奈良国立博物館特別陳列「聖武天皇の大嘗祭木簡」・平城宮跡資料館秋期特別展「聖武天皇が即位したとき。一聖武天皇即位1300年記念一」へ出陳するとともに、木簡に残存する紐の科学的分析を実施した。また海外とは中国社会科学院古代史研究所、河北師範大学、韓国慶北大学校、台湾・中央研究院との共同研究を継続し、国内では福島市西久保遺跡・山口市周防鑄銭司跡出土木簡や各地の墨書き器などの釈読に協力した。くわえて西隆寺跡出土木簡75点（古文書）、飛鳥池遺跡出土木簡108点（考古資料一括）が重要文化財の答申を受け指定さ

れる見込みとなった。

●建造物遺構研究室の調査と研究

組織改編の結果、上部構造の遺存に関わらず、建築遺構全般を研究対象とすることとなった。建造物調査として、奈良県の社寺建築悉皆調査を継続しており、3市町で実施した。また、この調査の成果を活用しながら、東大寺との連携研究として東大寺境内の総合的調査を、生駒市および斑鳩町からの受託研究として、民家等へ対象を拡張しながら両市町全域の調査をおこなった。また、秋田県仙北市から角館の武家住宅調査を、横手市から西部地区建造物調査を受託し、報告書を刊行した。くわえて、過年度の調査のフォローアップも成果に繋がった。古代建築研究として取り組む法隆寺における古材調査にもとづき、金堂古材3,284点が国宝の附に追加指定された。また、2023年の報告書刊行を受け、佐渡市小木町が重要伝統的建造物群保存地区に選定され、高野町の金剛峯寺壇上伽藍2件11棟が重要文化財に指定された。高野町の調査報告は、町全域における悉皆調査による歴史的建造物の全容解明と報告書での公表が高い評価をうけ、奈文研と高野町の連名で、建築史学会賞を受賞した。

発掘遺構にもとづく調査研究として、都城発掘調査部飛鳥・藤原地区と協力して『石神遺跡発掘調査報告I』を刊行した。

●景観研究室の調査と研究

景観研究室では、文化的景観の概念および保存・活用のための基礎的・応用的な調査研究に取り組んでいる。また、文化的景観保護に係る基礎的情報の収集・整理・検討・公開を進めつつ、具体的な事例として、地方公共団体からの受託研究等を通じて、保護措置の諸問題について検討を重ねている。

2024年度は、文化的景観研究集会（第12回）「風景を耕す、その悦び」を開催し、風景の捉え方に関する基礎的・学術的検討をおこなった。その際、研究者や行政担当者、地域づくり団体関係者等、141名の参加を得た。また、文化庁と連携しながら研究集会の場でポスターセッションを開催し、21題の応募を受けつつ、情報交換の場を提供した。現地調査では、明日香村の歴史的風土、智頭の林業景観、平城宮跡およびその周辺に関する調査研究を実施し、地域特性の解明や調査手法の検討等をおこなった。受託研究として和束の茶業景観と天草市崎津・今富の文化的景観の調査をおこない、価値の見直し、文化的景観保存活用と景観計画による面的な保全方策等を検討した。さらに、令和6

年能登半島地震と奥能登豪雨による被災を受けた石川県輪島市の重要文化的景観について、文化庁文化的景観部門との連携のもと、現地での被災状況や聞き取り等の調査および今後の支援の検討などをおこなった。

●遺跡研究室の調査と研究

遺跡研究室では遺跡の保存活用と庭園について調査研究をおこなっている。

遺跡等マネジメントに関する調査研究では、遺跡等マネジメント研究会「遺跡が活きる遺跡のマネジメント」を3月17日に実施した。また、奈良県の「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の世界遺産への推薦関係書類作成支援としてモニタリングマニュアル素案作成をおこなった。さらに文化財石垣の保全が社会的課題となっていることに鑑み、文化財担当者研修 文化財石垣保存整備課程の継続的実施を目的に、石川県金沢城調査研究所覚書を締結した。

平城宮跡の活用に関する実践的研究では、文化財活用センターと協働で、当研究所が復元した古代のボードゲーム「かりうち」について2か年目となるアウトドア事業を実施し、新たに古代遺跡を有する地域等に講師派遣をおこなった。また平城宮跡資料館秋期特別展の関連企画として、イベント「ナイトサイトミュージアム」を実施し、平城宮跡の大極門や東区朝堂院で夜間の幻想的な雰囲気を味わう新たな取り組みを実施した。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターは、遺跡調査技術研究室、環境考古学研究室、年代学研究室および保存修復科学研究室の4室から組織されている。当センターは、文化財が内包する価値の抽出を目的とした調査、研究、および文化財の物質的な保存に関する研究に取り組み、成果を学会発表や論文などで公表するとともに、研修などで広く普及をはかっている。また、国や地方公共団体の要請による文化財保護に関する専門的な助言や協力をおこなっている。2024年度の活動内容は以下のとおりである。

●遺跡調査技術研究室

全国の遺跡から出土した地震災害痕跡に関するデータベース構築を進めた。報告書からの語句抽出や「地震」「断層」などのキーワード検索により、災害痕跡717件（41都道府県）を特定し、「全国遺跡報告総覧」

で公開を開始した。自然言語処理による分析も開始し、明記されていない災害痕跡の抽出を目指す基礎研究も進行中である。また、外部機関との協業体制を整備し、「遺跡データ統合入力システム（仮称）」の開発にも着手した。リアルタイムフォトグラメトリーやCTによる構造解析手法の開発、三次元ソフトの使用手順書（200頁超）も作成し、文化財活用の支援体制を強化した。さらに、地中レーダーを用いた全国6件の遺跡探査、災害痕跡と表層地質情報の標準化とデータベース化も進行中である。地震史料に基づく1830年文政京都地震の震度分布分析により、震源断層や地震規模の高精度推定も達成した。くわえて、ひかり拓本技術を活用した災害伝承碑文の研究普及にも取り組み、講座や技術提供を通して広報活動をおこなった。

●環境考古学研究室

石神遺跡、藤原宮跡、平城京左京三条一坊二坪および荒屋敷貝塚の出土動物遺存体約650点の分類・分析を実施した。渥美半島貝塚群出土の動物遺存体に関する原稿を執筆し、総括報告書に寄稿した。正倉院宝物では、動物由来素材「牙甲角」の初の科学的調査をおこない、成果を取りまとめた。また、奈良学園や奈良教育大学附属中学校で特別授業を実施し、さらに兵庫県立考古博物館や奈良文化財研究所東京講演会で一般向け講演をおこない、広く成果の普及をはかった。

●年代学研究室

出土木材（平城宮・京跡、藤原京跡、川西遺跡）や建造物（広隆寺講堂、石清水八幡宮摂社）を対象に年輪年代調査を実施し、計210件・約3.7万本の年輪データを蓄積した。石清水八幡宮の調査では原産地の異なる2つの部材群を特定した。また、平城京出土遺物の年輪データセット（高解像度年輪画像、計測場所表示画像、計測値）の公開を進めた。栗塚古墳出土の埴輪を対象に埴輪に転写された木目痕跡から年輪調査も実施し製作技法研究に貢献した。さらに奈良学園や愛知県立大学で特別授業をおこない、成果の普及にも努めた。

●保存科学

赤外線顕微鏡観察により、天然岩絵具と新岩絵具、緑青とラピスラズリの識別の有効性を確認した。弥生時代中期に流入したインド・パシフィックビーズの蛍光X線分析による化学組成のデータ収集を進めたほか、染料の可視スペクトルデータベースを作成した。さらに、碧玉製玉類の産地推定に資する管玉の鉱物組

成データも継続的に蓄積した。

平城宮跡や飛鳥・藤原宮跡出土の1100点超の遺物を対象に、劣化状態分析と保存処理を実施した。木製遺物の保存期間を短縮する新規薬剤含浸法の研究では、一定の有効性が確認され論投稿をおこなった。鉄製遺物については劣化特性予測のための詳細調査や新たな脱塩技術の基礎研究も進行中である。これらの成果は、日本文化財科学会などで公表され、自治体職員向け研修でも共有された。また、日本木材学会との共催による研究集会では、木質文化財に関する最新の研究成果が発信され、分野横断的な連携と交流の促進をはかった。

遺跡保存に関する研究では、文化財としての庭園景石や古墳の保存に関する多面的な検討をおこなった。一乗谷朝倉氏遺跡および江馬氏館跡庭園では、凍結破砕による景石劣化防止のため冬季養生試験を実施し、輻射率の低い材料が有効であることを実測で確認した。また、既に劣化が進んだ景石には、新たに名古屋大学と接着修理材料の検討に着手した。さらに、基礎研究として、軟岩の乾湿繰り返しによる劣化メカニズムの解明や漆喰壁画を安全に保存する環境の推定を試みた。

国際学術交流

奈文研では、世界の様々な国と地域に所在する諸機関と協約・協定等を締結し、学術共同研究や交流・協力事業を展開している。2024年度は、海外渡航による対面での事業を中心に実施し、オンラインによる取り組みも一部継続した。中国については、中国社会科学院考古研究所との都城遺跡の比較研究および学術交流、河南省文物考古研究院との窯跡出土遺物等の共同研究、遼寧省文物考古研究院との三燕文化遺物の共同研究、復旦大学および大足石刻研究院との三者による大足石刻保護に関する共同研究、中国社会科学院古代史研究所および河北師範大学との木簡・簡牘の共同研究を進めている。韓国については、国立文化遺産研究院との「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」および慶州国立文化遺産研究所との発掘調査交流を継続している。また国立益山博物館と学術交流に関する協約書を結んでいるほか、慶北大学校と木簡に関する共同研究をおこなっている。カンボジアについては、アンコール・シェムリアップ地域遺跡保護整備機構（APSARA）と共同で、2002年よりアンコール・トム内の西トップ遺跡の調査研究および保存修復

事業、人材育成事業などを実施している。ウズベキスタンでは、2022年度から2024年度にかけて国際中央アジア研究所およびサマルカンド考古学研究所と、文化庁委託事業「ウズベキスタンにおける考古遺産の科学的調査に関する技術 移転を目的とした拠点交流事業」を実施し、完了後も学術交流を継続している。台湾の中央研究院歴史語言研究所とは、木簡・簡牘の研究資源化についての交流を進めている。アジア諸国以外では、英国に所在する三機関との学術交流を、近年活発におこなっている。セインズベリー日本藝術研究所（SISJAC）とは日本考古学の国際的発信を進めており、ケンブリッジ大学およびヨーク大学とは、欧州研究会議や日本学術振興会の助成を受けた共同研究を推進している。欧州では、イタリアのトリノ大学やスペインのバスク・クリナリーセンターと人的交流をおこなっている。また、ウクライナ戦災文化財の保護事業も、文化庁からの受託事業などを通じて実施している。以上にくわえ、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）がおこなう研修への協力を継続している。

公開講演会

◆奈良文化財研究所第130回公開講演会
「東大寺東塔（天平塔）を復元する！」
2024年6月29日（土）
【会場参加 253名】

■講演 「文献からみる高さは…天平塔、100年の謎を解き明かす～歴史学の視点から～」
文化遺産部主任研究員 山本 祥隆

■講演 「明治以来の時を経て…令和によりがえる天平塔～建築史学の視点から～」
文化遺産部建造物遺構研究室研究員 目黒 新悟

◆奈良文化財研究所第131回公開講演会
「奈良時代の大嘗祭—聖武天皇即位1300年を記念して」
2024年10月26日（土）
【会場参加 242名】

■講演 「平城宮でみつかった奈良時代の大嘗宮遺構」
文化遺産部主任研究員 福嶋 啓人

■講演 「大嘗祭木簡の語ること」
文化遺産部歴史史料研究室長 山本 崇

◆聖武天皇即位1300年記念特別講演会
「聖武天皇の宮—平城宮、恭仁宮、紫香楽宮、そして難波宮—」
2024年10月27日（日）
【会場参加 210名】

■基調講演 「聖武天皇の希望、苦悩、救い」
糸原 永遠男（大阪歴史博物館名誉館長）

■パネルディスカッション 「聖武天皇の宮跡、調査研究の最前線」

◆奈良文化財研究所第15回東京講演会
「奈文研、食に挑む—ヒトは何をどのように食べてきたのか?—」
2024年11月16日（土）
【会場参加 174名】

■講演 「骨からみた古代の食事」
埋蔵文化財センター 環境考古学研究室長 山崎 健

■講演 「古代都城出土土器・箸からみた食生活の変化」
企画調整部 主任研究員 小田 裕樹

■講演 「ウンチから天平人の腹を探る」
都城発掘調査部 副部長 今井 晃樹

■講演 「生体分子から読み解く日本列島3万年の調理史」
企画調整部 国際遺跡研究室長 庄田 慎矢

■パネルディスカッション 「奈文研の食文化研究」
コーディネーター 文化遺産部 上席研究員 西田 紀子
パネラー 山崎、小田、今井、庄田

研究集会・学会・研究会等の活動

◆シンポジウム「東アジア冶金史学の開拓」
2024年6月8日

◆XRミートアップ奈良 文化財 × XR
2024年6月21日

◆古代官衙・集落研究会 特別研究集会
「律令国家成立期の地域動態1—筑紫から大宰府へ—」
2024年9月21日・22日

◆文化的景観研究集会（第12回）
2024年11月16日

◆木簡学会第46回研究集会
2024年12月7日・8日

◆保存科学研究集会2024・日本木材学会
木質文化財研究会2024年度例会
「木質文化財の保存修復に関する新たな視点・最近の取組」
2024年12月14日

◆第28回古代官衙・集落研究集会
「古代集落の構造と変遷5」（古代集落を考える5）
2024年12月21日・22日

◆国際シンポジウム「ウクライナの文化遺産と戦災」
2025年1月19日

◆第24回古代瓦研究会シンポジウム
「平安時代後期の軒瓦」
2025年2月8日・9日

科学研究費助成事業等

◆植物考古学から探るイネ、雑穀、ムギ食文化の交流と変容
庄田 慎矢 学術変革領域研究（A）
計画研究

◆災害で埋没した建物による民家建築史の研究 箱崎 和久 基盤研究（A）

◆東北アジアの農耕化過程における食と調理の変化への考古生化学的アプローチ
庄田 慎矢 基盤研究（A）

◆東アジアを俯瞰した日本列島かな文字確立に関する総合的研究
馬場 基 基盤研究（A）

◆蛍光X線分析と鉱物組成分析による大和の古代寺院・宮都出土瓦の生産・供給体制の研究 清野 孝之 基盤研究（B）

◆古代都城から出土する製塩土器の生産地推定 神野 恵 基盤研究（B）

◆土製鋳型を中心とした冶金関連資料による東アジア冶金史学の構築 丹羽 崇史 基盤研究（B）

◆古建築用語の相互訳及び英訳を通しての系統的把握による東アジア木造建築史の基盤構築 鈴木 智大 基盤研究（B）

◆古代官衙における空間構造の変遷と展開に関する実証的研究 小田 裕樹 基盤研究（B）

◆古代における年輪年代学的木材産地推定を可能にする標準年輪曲線ネットワークの整備 星野 安治 基盤研究（B）

◆平城宮跡・藤原宮跡・飛鳥宮跡における風景の再現・創造・継承に関する計画論的研究 本中 真 基盤研究（B）

◆石造物による被災履歴学習を通した持続可能な社会のための地域総合学習プログラム開発 上畠 英之 基盤研究（B）

◆古代東アジアにおける壁画図像の伝播と変容の考古学・文化財科学による研究 石橋 茂登 基盤研究（B）

◆劣化現象の機構論的理解に基づく出土鉄製文化財の展示環境条件の新提案 柳田 明進 基盤研究（B）

◆遺跡を構成する多孔質材料の乾湿繰り返し劣化メカニズムの解明と劣化抑制手法の開発 脇谷 草一郎 基盤研究（B）

◆カザフスタンにおける現生人類北回り拡散ルートの解明に関する国際共同研究の基盤強化 国武 貞克 国際共同研究強化（B）

◆東アジア窯業考古学の開拓：奈良三彩成立過程解明を目的として
丹羽 崇史 海外連携研究

◆絵画表現の多様性を生みだす彩色材料のナノ構造 杉岡 奈穂子 基盤研究 (C)

◆古墳に埋葬された鉄製文化財の腐食は予測可能か？—数値解析による現地保存評価の確立 柳田 明進 基盤研究 (C)

◆古代における食文化の実態解明に関する環境考古学的研究
山崎 健 基盤研究 (C)

◆三次元データで拓く木簡研究の新地平
山本 祥隆 基盤研究 (C)

◆出土漆塗膜の模擬試料作成の試み—より安定的な保存処理法の開発のために
楊 曼寧 基盤研究 (C)

◆大嘗宮にみる宮中祭祀施設の配置・造営計画に関する研究
福嶋 啓人 基盤研究 (C)

◆近代庭園における遺跡由来石造物の取り扱いとインタープリテーションに関する研究
内田 和伸 基盤研究 (C)

◆飛鳥地域を中心とした古代彩色の絵画技法および素材の研究
濱村 美緒 基盤研究 (C)

◆丹波丹後地域出土文字資料の悉皆再釈読による古代山陰道の歴史的地域的特質の解明
山本 崇 基盤研究 (C)

◆前4千年紀末南西カナン出土土器群の悉皆分析によるエジプト系拠点の考古学的検証
山藤 正敏 基盤研究 (C)

◆令制施行時の土器・陶器調納制と都城・宮都出土土器の基礎的研究
森川 実 基盤研究 (C)

◆生産技術伝承の高精度検証と社会構造復元に基づく埴輪生産体制の維持管理モデルの構築 和田 一之輔 基盤研究 (C)

◆地域における古墳と寺院の関係とその社会的背景 林 正憲 基盤研究 (C)

◆水浸出土木製遺物の保存処理の飛躍的効率化を実現する非水溶性薬剤含浸法の開発
松田 和貴 基盤研究 (C)

◆境界領域のガラス玉—日本ガラス史構築に向けての基礎的研究 田村 朋美 基盤研究 (C)

◆近世末期から近代の住宅庭園の地域性とその要因—地域の文化遺産の継承に向けて
中島 義晴 基盤研究 (C)

◆季節の中でかごを編む：複雑狩猟採集民の植物資源管理の民俗考古学的研究
西原 和代 基盤研究 (C)

◆飛鳥地域の土器編年の全容解明と宮名比定に関する考古学的研究
若杉 智宏 基盤研究 (C)

◆発掘調査記録のデジタルトランスフォーメーション 山口 欧志 基盤研究 (C)

◆多様な絵画表現技法を可能にする白色彩色材料のナノ構造解析
杉岡 奈穂子 基盤研究 (C)

◆地域性の生成メカニズムを価値指標とする変化の評価と調整の計画論
小浦 久子 基盤研究 (C)

◆歴史災害の実像解明への考古・歴史・地質学的複合解析による災害履歴検索地図の開発 村田 泰輔 挑戦的研究 (開拓)

◆XR技術を活用した発掘・被災文化財保護現場のデジタルトランスフォーメーション 金田 明大 挑戦的研究 (開拓)

◆埴輪ハケメの年輪年代学：年輪年代学的同一材推定を応用した埴輪同工品の認定
星野 安治 挑戦的研究 (萌芽)

◆後期旧石器時代開始期の日本列島における新人到来研究の革新
国武 貞克 挑戦的研究 (萌芽)

◆出土カンボジア漆分析に関する学際的研究
佐藤 由似 挑戦的研究 (萌芽)

◆X線CTを用いた非破壊観察による固着資料の文字復元
上帽 英之 挑戦的研究 (萌芽)

◆石垣刻印データベースによる城郭普請の解明：生産地・作業集団・普請プロセス
高田 祐一 挑戦的研究 (萌芽)

◆発掘調査で発見される地震痕跡の分布と地質構造の応答性解明のための萌芽研究
村田 泰輔 挑戦的研究 (萌芽)

◆墨書き木製品の分類を手がかりとした日本における木簡利用全史の解明
藤間 温子 若手研究

◆文化的景観における棚田集落の相対的価値の解明にむけた比較研究
恵谷 浩子 若手研究

◆石造物からみるブリテン島における古代と初期中世の境界 岩永 玲 若手研究

◆玉類の流通からみた弥生・古墳時代併行期の日韓交渉 谷澤 亜里 若手研究

◆西日本集落遺跡の分析に基づく古代地域社会の実証的研究 道上 祥武 若手研究

◆文化財修理に用いられる和紙の膨潤収縮挙動 金 春貞 若手研究

◆考古系展示施設における観覧行動分析とそれに基づく多様な「学び」の構築と実践 廣瀬 智子 若手研究

◆越後大工・小黒空右衛門一族の作風—近世在方大工の作家論的研究
目黒 新悟 若手研究

◆『築山庭造伝』前編・後編にみる作庭技術とその流布に関する基礎的研究
高橋 知奈津 若手研究

◆大破した寺院聖教の保存・活用にむけた調査方法に関する研究
橋 悠太 若手研究

◆残材と周辺植生に基づく古墳時代集落における木材調達とその利用に関する研究
浦 蓉子 若手研究

◆3Dデジタル技術等の多角的応用による土器製作者の動的身体技法復元
平川 ひろみ 若手研究

◆平安京・大和国における瓦生産・流通構造—9～12世紀を中心にして
田中 龍一 研究活動スタート支援

◆顕在化した遺跡である古墳が持つ顕著な文化財的価値とその現在的な利活用に関する研究 川畠 純 研究活動スタート支援

◆戦後文化財修理としての桂離宮御殿整備工事の研究—合成樹脂を始めとした新技術の導入 高野 麗 研究活動スタート支援

◆古墳壁画の漆喰下地がCu含有顔料に及ぼす劣化機構の解明
大迫 美月 研究活動スタート支援

◆博物館施設を拠点とする現代飛鳥地域の景観変化と地域特性の再構築
竹内 祥一朗 研究活動スタート支援

◆日本産材に適応した少青年輪試料に対する年輪年代学的解析手法の開発
星野 安治 特別研究員奨励費

◆中央アジアにおける上部旧石器時代初期石器群の石材利用研究
須賀 永帰 特別研究員奨励費

◆木質遺物の年輪年代を情報源とした古代の遺跡における高精度年代体系構築
前田 仁暉 特別研究員奨励費

◆発掘調査GISデータベースの構築と災害研究・遺跡管理への活用
武内 樹治 特別研究員奨励費

◆奈良の都の木簡に会いに行こう！2024
馬場 基 ひらめき☆ときめきサイエンス
～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHII

国が実施する事業等についての調査・協力

●平城宮・京跡の整備と情報発信

国土交通省や文化庁による各種事業に対して、専門的見地からの助言等をおこなった。

国土交通省による東樓の復原整備工事については、定例会議への出席、ボランティアガイド研修会での講師役、広報資料作成への協力、工事への指導助言を継続した。復原整備工事にあたっては、復原研究成果を踏まえた指導助言をおこない、古代技法を用いた純銅製の東樓垂木木口金具を製作し、東樓への取付に協力した。さらに、竹中工務店からの受託事業として、東樓復原整備工事工程の写真を撮影した。

また、2010年度から進めてきた第一次大極殿院復原研究について、報告書の電子版データを完成させた。東樓上層から朝堂院広場を眺めた復原イラストや、復原研究や整備工事の内容を紹介した動画を制作した。

平城宮いざない館の活動については、第4展示室の展示の学芸業務および平城宮跡管理センターと共に夏期企画展「万葉挽歌（レクイエム）—人形からみる古の奈良—」を開催した。また、関係機関への協力や連絡調整を継続した。

このほか、文化庁がおこなう平城宮跡の整備管理業務、歴史的環境維持業務について、助言をおこなうとともに、現地において調整・対応した。

（西田紀子・神野 恵・中島義晴）

●高松塚古墳壁画の保存活用のための調査研究

修理が完了した壁画を保存公開する新施設での壁画の安全な保存環境の策定のための調査研究、および壁画の材料等に関する調査研究を継続的に実施している。2024年度は材料中の熱・水分移動とそれとともに变形挙動解析や温熱環境の周期的变化に対する材料の变形挙動の把握に取り組むとともに、新施設建設時に発生する振動の壁画および石室石材への影響の検討として、各石材の固有振動解析を実施しリスク評価をおこなった。さらに新たな材料調査として、ラマン分光法による青色顔料分析の基礎的検討をおこなうとともに、分光分析についてこれまで取得した分析データの解析をおこなった。

過去の発掘調査成果の整理や関連古墳に関する調査研究としては、飛鳥資料館所蔵昭和47年出土品の再整理作業を進めるとともに、高松塚古墳現地での活用に用いるためのタブレット端末を用いたVRコンテンツを作成した。さらに飛鳥の主要古墳分布域に対する航

空レーザー測量、高取町東明神古墳、同松山呑谷古墳に対するUAVレーザー計測、鬼の俎・雪隠に対する地上レーザー計測等を実施した。また、文化庁の壁画仮設修理施設の一般公開への協力として、現地に研究員を派遣した。

（廣瀬 覚）

●キトラ古墳に関する調査研究

保存・活用に関する事業では、出土棺材漆片等の遺物の適切な保存方法を検討するための研究、発掘調査により得られた資料およびデータの公開に向けた整理・三次元モデル作成とデジタルデータ化、壁画取り外し後の墓道・石室の調査成果の整理・検討、墳丘に施した植栽の安定化に関する検討と乾拓体験会等による活用事業、壁画の現地保存を検討するための大分県における装飾古墳の調査、青龍の図像を検討するための光学調査等を実施した。

壁画の安定化に関する事業では、壁画を安全に測定できる可搬式の分光分析装置を用いた壁画の調査データの整理・検討を進め、中長期の壁画の状態変化を評価するための高精細カメラによる記録の整理等をおこなった。

キトラ古墳壁画保存管理施設では、研究員が常駐して展示室等における温度や湿度等の日常管理および運営をおこなうとともに、施設内の環境調査、壁画および出土遺物等の公開等を実施した。また、移動プラネタリウムのイベントを開催した。

（若杉智宏）

現地説明会

◆2024年9月21日（土）

東大寺講堂・三面僧坊跡発掘調査
史跡東大寺旧境内発掘調査団

◆2024年11月9日（土）

薬師寺回廊西北隅発掘調査（平城第665次調査）
発掘調査現地見学会
都城発掘調査部（平城地区）
研究員 和田 一之輔
参加者 1,201人 調査面積 468 m²

◆2025年3月8日（土）

石神遺跡東方の調査（飛鳥藤原第217次調査）
発掘調査現地見学会
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）
参加者 619人 調査面積 297 m²

2 展示・公開

飛鳥資料館の展示

◆ミニ展示「高松塚古墳壁画 国宝指定50周年記念展」

2024年4月19日～5月19日

高松塚古墳壁画の国宝指定50年を記念し、平山郁夫などの著名な日本画家たちによって描かれた「高松塚古墳壁画の現状模写」を展示した。また、模写制作時のエピソードや壁画発見から現在にいたるまでの年表、模写からわかる当時の石室内の様子についてパネル解説した。会期中の入館者数4,221人。

◆夏期企画展「第15回 写真コンテスト「飛鳥の音」作品展」

2024年7月12日～9月16日

2011年から開催し、今回で15回目となる本展では、「飛鳥の音」をテーマに作品を募集し、展示・表彰した。飛鳥の風景の中に隠れた「音」に着目し、そこを通して見える人々の営みを写した116点の作品が寄せられた。研究員による審査や来館者投票を経て入賞した12点については、9月8日に表彰式を執りおこなった。会期中に関連イベント「日光写真をつくろう」を実施した（参加者数合計51人）。会期中の入館者数3,200人。応募116点。

◆秋期特別展「水と暮らしの風景史 古地図と景観がひらく飛鳥」

2024年10月4日～12月1日

江戸時代から明治時代の古地図・古文書のほか、現地でおこなった文化的景観の調査成果などを中心として、水を活かして営まれてきた飛鳥の暮らしと風景の来歴・魅力を読み解き、紹介した。会期中の入館者数6,370人。図録『水と暮らしの風景史 古地図と景観がひらく飛鳥』刊行。関連講演会「飛鳥のみかた」の第1回は恵谷浩子（文化遺産部）「田んぼの見方—明日香村の灌漑システムを読み解く」（10月12日、参加者40人）、第2回は竹内祥一朗（飛鳥資料館）「古地図の見方—江戸・明治の飛鳥の風景を読み解く」（11月2日、参加者51人）。ウォークイベントを1回、ギャラリートークを2回実施した。



秋期特別展「水と暮らしの風景史 古地図と景観がひらく飛鳥」展示の様子

◆ウォークイベント「奈文研研究員と歩く飛鳥2025」

奈文研研究員の解説とともに飛鳥資料館周辺の古代寺院跡を見て歩くイベントを2～3月に計4回実施した。参加者合計59名。

平城宮いざない館の展示

◆夏期企画展

「万葉挽歌（レクイエム）一人形からみる古の奈良—いにしえ—」

2024年7月13日～9月1日

アマチュア人形作家である永瀬卓氏が制作した作品のうち、『万葉集』に登場する人物を中心に展示して、古代奈良の歴史を紹介。平城宮跡管理センターと奈良大学共催。ギャラリートーク6回のほか、関連イベントにトークイベント「小さな出会いが結んだ大きな物語」を開催。会期中の平城宮いざない館の入館者数22,613人。図録刊行。

平城宮跡資料館の展示

◆秋期特別展

「聖武天皇が即位したとき。—聖武天皇即位1300年記念—」

2024年10月22日～12月8日

聖武天皇即位から1300年を記念し、聖武天皇と平城宮との関わりをテーマに、大嘗祭に関わる木簡をはじめ、これまでの発掘調査の成果や遺物の展示をおこなった。ギャラリートーク5回のほか、関連イベントに「ナイト☆サイト☆ミュージアム—聖武天皇即位1300年をお祝いしよう！—」を開催。そのほか、大阪歴史博物館との共催で聖武天皇即位1300年記念特別講演会「聖武天皇の宮—平城宮、恭仁宮、紫香楽宮、そして難波宮—」を大阪歴史博物館で、奈良国立博物館との共催で特別陳列「聖武天皇の大嘗祭木簡」（会期：10月22日～11月11日）を奈良国立博物館なら仏像館で開催。会期中の入館者数8,154人。図録刊行。



◆春期企画展

「UnEarth 2025—平城宮・京の調査研究最前線—」

2025年2月15日～4月13日

『奈良文化財研究所紀要2022』および『奈良文化財研究所発掘調査報告2023』で報告した発掘調査成果を中心に、出土遺物と調査・研究成果の展示をおこなった。ギャラリートーク8回のほか、関連イベントにウォークイベント「奈文研研究員と歩く平城宮跡」を開催。会期中の入館者数6,497人。

解説ボランティア事業

平城宮跡解説ボランティア事業は、平城宮跡に来訪される方へ、平城宮跡の理解を深めていただけるよう

平城宮跡資料館を中心に第一次大極殿、朱雀門、遺構展示館、東院庭園、平城宮いざない館の定点で案内解説をおこなっている。1999年10月から実施しているが、2025年3月31日現在解説ボランティアの登録数は107名である。

2024年度「平城宮跡解説ボランティア」の活動状況（活動日数264日間）

各定点において解説を受けた来訪者延べ人数							解説をした平城宮跡解説ボランティアの延べ人数
平城宮跡資料館	第一次大極殿	遺構展示館	朱雀門	東院庭園	平城宮いざない館	計	
7,834人	10,485人	4,303人	11,825人	4,385人	8,640人	38,832人	2,808人

2025.3.31現在

図書資料・データベースの公開

図書資料室では、文化財資料の中核的な拠点となるべく、歴史・考古学分野をはじめ、幅広く文化財関係の資料を収集している。また、本庁舎図書資料室においても一般公開施設として公開し、より快適な環境下で所外の研究者および一般の方々に図書・雑誌および展覧会カタログ等の閲覧・複写サービスをおこなっている。遠隔利用については、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILLを通じて図書の貸し出し、複写サービスをおこなっている。

また、奈文研の刊行物についても、主要なものについてはPDF化をおこない、学術情報リポジトリからインターネットを通じて公開している。



学術情報リポジトリの画面

公開データベース一覧		2024年度 アクセス数
1	史的文書DB	112,568
2	木簡庫（日本語・英語・韓国語・中国語（繁体）・中国語（簡体）の5種類）	120,816
3	木簡・くずし字解読システム-MOJIZO-	39,293
4	木簡人名データベース	2,549
5	全国木簡出土遺跡・報告書DB	1,112
6	和同開珎出土遺跡DB	1,610
7	平城京出土陶硯DB	728
8	3D Bone Atlas Database	※ 1
9	遺跡DB	7,282
10	古代地名検索システム	※ 1
11	Japanese Garden Dictionary	※ 1
12	薬師寺典籍文書DB	766
13	大宮家文書DB	726
14	所蔵図書DB	179,646
15	全国遺跡報告総覧	25,619,550
16	学術情報リポジトリ	
17	遺跡報告内論考データベース	※ 1
18	文化財総覧 WebGIS	2,712,969
19	奈良文化財研究所収蔵品データベース（日・多言語（英／中／韓）の2種類）	13,808
20	軒瓦三次元計測データベース	
21	3D DBViewer	※ 1
22	3D データベース：Sketchfab	※ 1
23	遺跡災害情報ポータルサイト	※ 1
24	遺跡の斜面保護データベース	※ 1
25	発掘庭園データベース	※ 1
26	報告書抄録データベース	※ 1
27	AR/VRクリエイティブプラットフォーム：STYLY	※ 1
28	文化財動画ライブラリー	※ 1
29	全国文化財イベントナビ	※ 1
30	文化財論文ナビ	※ 1

※1 アクセス数のカウントをしていない

3 その他

刊行物

刊行物（2024年度）

- ・学報第106冊『石神遺跡発掘調査報告 I—石造物出土の調査—』
- ・史料第95冊『山内清男コレクション I 縄文原体資料』
- ・史料第96冊『飛鳥・藤原宮出土墨書き器集成』
- ・研究報告第41冊『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用 6』第1分冊
- ・研究報告第41冊『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用 6』第2分冊
- ・研究報告第42冊『文化財多言語化研究報告 4』
- ・研究報告第43冊『第27回古代官衙・集落研究会報告書 古代集落の構造と変遷 4』
- ・研究報告第44冊『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用 7』
- ・研究報告第45冊『文化財多言語化研究報告 5』
- ・『第28回古代官衙・集落研究集会古代集落の構造と変遷 5 報告資料集』
- ・『古代官衙・集落研究会特別研究集会 律令国家成立期の地域動態 1』
- ・『古代瓦研究会第24回シンポジウム 平安時代後期の軒瓦 発表要旨集』
- ・飛鳥資料館図録第77冊『水と暮らしの風景史—古地図と景観がひらく飛鳥』
- ・『奈良文化財研究所紀要 2024』
- ・『奈良文化財研究所概要 2024』
- ・『奈文研ニュース』No.93、No.94
- ・『埋蔵文化財ニュース』187号

- ・『奈文研論叢』第5号
- ・『奈良文化財研究所発掘調査報告』2024
- ・『発掘調査報告書総目録』三重県編
- ・『発掘調査報告書総目録』長野県編
- ・『発掘調査報告書総目録』神奈川県編
- ・『発掘調査報告書総目録』宮城県編
- ・『発掘調査報告書総目録』静岡県編
- ・『発掘調査報告書総目録』埼玉県編
- ・『発掘調査報告書総目録』東京県編
- ・『発掘調査報告書総目録』福島県編
- ・『発掘調査報告書総目録』茨城県編
- ・『発掘調査報告書総目録』滋賀県編
- ・『発掘調査報告書総目録』京都県編
- ・『発掘調査報告書総目録』愛知県編
- ・『発掘調査報告書総目録』奈良県編
- ・『文化財防災文献総目録』
- ・『横手市西部地区建造物調査報告書』
- ・『仙北市角館武家住宅総合調査報告書』
- ・『西トップ遺跡調査修復 中間報告12—中央祠堂・南祠堂屋蓋部および仏教テラス基壇外装再構築編—』
- ・『平城宮第一次大極殿院の復元研究』
- ・夏期企画展図録『万葉挽歌一人形からみる古の奈良—』
- ・秋期特別展図録『聖武天皇が即位したとき。—聖武天皇即位—三〇〇年記念—』
- ・聖武天皇即位—三〇〇年記念 特別講演会 聖武天皇の宮—平城宮、恭仁宮、紫香楽宮、そして難波宮

